

論文審査の要旨

| | | | |
|---|----------------|-----|---------|
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 (教育学) | 氏名 | 澤 口 哲 弥 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第①・2項該当 | | |
| 論 文 題 目 | | | |
| 国語科クリティカル・リーディングの研究 | | | |
| 論文審査担当者 | | | |
| 主 査 | 教 授 | 難 波 | 博 孝 |
| 審査委員 | 教 授 | 間 瀬 | 茂 夫 |
| 審査委員 | 教 授 | 松 本 | 仁 志 |
| 〔論文審査の要旨〕 | | | |
| <p>本論文は、国語科教育における「クリティカルな読み」の先行研究の成果と課題を明らかにするための新しい理論を内外の先行研究に求め、読むことを社会的実践とするための理論的な土台を構成し、国語科クリティカル・リーディングの指導理論をカリキュラムも含め構築したうえで、実践の場でその理論を検証し、実効性をもった指導理論として調整を図り、新しい教育状況の中で国語科クリティカル・リーディング（CR）の可能性を展望したものである。</p> <p>本論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、国語科 CR に指導理論構築に向かうための礎を確かめるべく、国語科教育における「クリティカルな読み」の先行指導理論を調査し、その成果と課題を明らかにした。</p> <p>第2章では、第1章で示唆された国語科教育における「クリティカルな読み」の先行指導理論、特にイギリスの英語教育研究者 Wallace の Critical reading 理論の課題の解決の道筋を示し、国語科 CR の指導理論構築のための理論となる先行指導理論を整理した。</p> <p>第3章では、第2章で明らかになった Wallace の Critical reading 理論とその国語科教育への援用可能性をもとに、2017年に改訂される新学習指導要領等、新しい教育状況とそれらが国語科に与える影響をふまえながら、今後必要となる学びの要素を措定し、国語科 CR の指導理論を構築した。</p> <p>第4章から第6章までは、第3章で構築した国語科 CR の指導理論を実践の場に適用させる第一歩として、既存の国語科の教科書教材を国語科 CR の観点から分析し、それらの教材や学習の手引きを改編した。そのことによって、現行の指導要領（2008、2009年告示）のもとに作成された国語科教材の成果と課題を明らかにするとともに、国語科 CR の指導理論がどのようにそこに改良を加えていけるのかを考え、提案した。</p> <p>第7章では、新学習指導要領が公示されるなどの新しい教育状況の中にあって、学力観がどのように変化しているのか、また今後どのような学力の育成が国語科教育に求められるのかを分析し、国語科 CR の指導理論がそこに寄与する可能性について考察した。</p> | | | |

本論文の成果は次のとおりである。

第一に、国語科教育における「クリティカルな読み」の先行研究の整理した結果、ことばに着目することを中心としながら読むことを社会的なこととして扱う理論がなく、ことばに着目しながら読むことを社会的な実践に拡張していく理論が必要であることがわかった点である。

第二に、フェアクロフ、フレイレ、ハリデー、ハーバーマスなどの研究を背景理論とした Wallace の Critical Reading 理論が、日本における国語科 CR 理論の土台にもなりうるということがわかった点である。

第三に、Wallace の Critical Reading の理論に加え、新学習指導要領の方向性や OECD の読解方略の理論を参考とし、より実効性のある今日の国語科教育の状況に見合った国語科 CR の指導理論の構築を目指しカリキュラムとしてまとめた点である。

第四に、国語科 CR の指導理論を、新しい教育状況の中でどのように活かせるかを、新学習指導要領の方向性や官民あわせたさまざまなテスト、問題集の分析から考察し、素材が従来のような文字テキストであっても、国語科 CR の理論を援用すれば十分新しい教育状況に適応できることを示した点である。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

1. 先行する国語科教育における「クリティカルな読み」の指導理論をマトリックスの形で整理し、ことばに着目しながら読むことを社会的な実践に拡張していく理論がかけられていることを明らかにした点である。日本の国語科教育研究／実践においては、ことばに着目した「クリティカルな読み」の指導理論やことばから離れたメディアリテラシーに関わる「クリティカルな読み」の指導理論はあったが、ことばと社会とを連携させた読みの指導理論に弱さが合ったことを明確に示すことができた。
2. 哲学や第二言語教育、テキスト言語学の理論的背景を持つ Wallace の Critical Reading を援用することで、グローバルな視点から国語科 Critical Reading の指導理論を打ち立てた点である。本論文の研究成果を、今度は世界の言語教育に生かすことでさらなる発展が期待できる。
3. 小中高の教育現場に対し、具体的な国語科 Critical Reading の実践を提案できた点である。現行の国語科教科書教材を用いて国語科 Critical Reading の実践をどのように行えばいいか提案することで、現実に実行できる研究とすることができた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 30年 2月 13日